

第6回 八戸市生活支援体制整備推進協議会 会議録

日時 平成30年11月28日(水) 13時30分

場所 はちふくプラザねじょう 4階 第1教室

○出席者(7名)

吉田委員、御厨委員、高渕委員、堀内委員、船橋委員、小柳委員、池田委員

○欠席委員(1名)

豊山委員

○事務局

豊川福祉部長兼福祉事務所長、山道福祉部次長兼障がい福祉課長、中里高齢福祉課長、山村地域包括支援センター所長、石木田主査、山口主査兼社会福祉士、島田主査兼社会福祉士

開会

山口主査 : 本日は、お忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

次第に入ります前に、資料の確認をお願いいたします。資料は、次第、資料1から資料5でございます。足りない方はいらっしゃいませんか。

本日、豊山委員が所用のため欠席でございますが、出席の委員は7名となっておりますので、八戸市生活支援体制整備推進協議会規則第5条第2項により、協議会が成立しておりますことを御報告いたします。

それでは、定刻となりましたので、ただいまより、八戸市生活支援体制整備推進協議会を始めさせていただきます。

私は、高齢福祉課の山口と申します。どうぞ、よろしくをお願いいたします。

まず始めに、小柳会長より御挨拶をお願いいたします。

会長挨拶

小柳会長 : 本日はお忙しい中、お越しいただきましてありがとうございます。

先日、沖縄県の高齢化率が21.1%となり、これによって全都道府県が超高齢社会に突入したと報道されておりました。ちなみに青森県は、2018年2月1日現在の数値が31.32%で、高齢化率が40%を超える自治体は9町村という状況にあり、いわば超高齢社会の先頭集団を走っている状況になっております。

そうしたなか、10月12日の高齢社会フォーラム in 八戸では、年齢を重ね

でも活躍されている方の表彰と事例発表があり、県内の生き生きとした高齢者に触れることができたうえ、「シニアが輝く、シニアを輝かせる地域づくり」と題したパネルディスカッションでは、これからの高齢社会を明るく活力あるものにするための議論が交わされました。

高齢化率の上昇は時にネガティブな論じられ方をしてしまいますが、これからは明るい高齢者像や社会のあり方を提案できるように議論を重ねていくべきではないかと思ったところです。

さて、今回は、3件の報告を受けた後、高齢社会フォーラムでの提言事項について検討する予定となっております。

委員の皆様におかれましては、忌憚のない御意見をお聞かせいただければと思います。

山口主査：小柳会長、ありがとうございました。

早速、議事に入らせていただきますので小柳会長に進行をお願いいたします。

報告案件

小柳会長：それでは議事に入りたいと思います。

次第2、報告案件1の「住み慣れた地域での生活を考えるワークショップの実施状況について」事務局からお願いします。

石木田主査：高齢福祉課の石木田でございます。報告案件1の住み慣れた地域での生活を考えるワークショップの実施状況について、私から御説明させていただきます。

それでは資料1を御覧ください。第5回住み慣れた地域での生活を考えるワークショップのアンケート集計結果になっております。こちらをもとに実施状況を説明させていただきます。

まず、実施日でございますが平成30年11月4日、日曜日に開催いたしました。対象地区といたしましては、市川、根岸、上長、下長、湊の5地区の住民を対象に開催しております。アンケートにつきましては、当日の参加者全員に配付し、回収したものが35枚、回収率は97.2%となっております。参加者の在住地区につきましては、市川地区が最も多くて9人、他は記載の通りでございます。当日は、市川と豊崎をAとBの2グループに分け、他は1グループずつといたしました。参加者の年齢構成につきましては70歳代が13人と最も多くなっております。性別では女性13名、男性5名、無回答が2名ということでした。

2ページをご覧いただきたいと思います。住民の皆様が行っている地域活動についての質問になっております。一番多かったのが民生委員で6名、続いて町内会役員が4名となっております、他は保健推進員、地区社会福祉協議会、ほっとサロンでございます。次にワークショップに参加した感想についてですが、全体では「参加してよかった」との回答が28名、「なんともいえない」が3名、「無回答」が4名となっております。このうち地域住民の方の内訳を見ますと、「参加してよかった」が13名、「なんともいえない」が3名、「無回答」が4名でございました。なお、学生の皆様におかれましては「参加してよかった」という回答を15名全員からいただいておりますので、表は省略いたしました。

続いて3ページをご覧ください。こちらは感想についての自由記述となっております。「参加してよかった」というところにつきまして、地域住民の方からの意見ですが「地域の良いところ、改善するところ、いろいろ問題を抱えているところを聞くことができた」という感想をいただいております。また地域住民の方の下から2つ目の意見でございますが、「学生さんたちの意見が聞けてよかった」「他地区の実状が少しでも分かった」ということで前向きな御意見を頂戴しております。学生の方からの特筆すべき意見としましては「年配の方との会話が楽しかった」「今日話したことが解決していけばいいと思う」「家で最後を迎えたいということをついに話を進めていっても面白そう」という御意見を頂戴しております。これらの御意見につきましてはワークショップを進めていくうえでの参考とさせていただきたいと考えております。次に「なんともいえない」とする意見の自由記述内容ですが、住民の方から「学生と共に異なる年齢とのワークはいいと思う」「初めての参加でどういう風にやるのか分からなかったが、若い人に支えられてどうにかできました」と前向きな意見がございましたが、一方で「参考になるところが無かった」という意見もございまして、これにつきましては当日の話し合いがうまくすすまなかった部分があるのではないかと推察しております。

資料の4ページを御覧ください。こちらは今後もワークショップを継続すべきかということに関する質問の回答になっております。全体としては「継続すべき」が28人、「なんともいえない」3人、「継続する必要は無い」が1人、「無回答」3人ということで、概ね今後も継続すべきとする意見を頂戴しております。続いて地域住民の方の内訳ですけれども、「継続すべき」が13人、「なんともいえない」が3人、「継続する必要は無い」が1人、「無回答」3人という結果で、学生の皆さんは全員が「継続すべき」との回答でした。続いて、各項目に関する自由記述についてでございます。地域住民の方からのコメントとしましては、「ネットワークづくりにはこのような話し合いが必

要と思われる」「必須と思うくらい地域の問題が山積みだと思う」ということで継続すべきとの御意見でした。

次に5ページを御覧ください。こちらは学生さんの意見になっておりますが、「八戸をより良くするために必要」「住民主体で住みよい街を作っていくべきだから」「同じ地区でも一度ではなく2回くらい実施したほうが良いと思う」「課題をピックアップし解決方法を話し合うことも大事だし、世代間交流にもなっていて良い」「地域のことを知る良いきっかけである」というところで、住みよい街づくりというところでワークショップの意義を感じていただいているようであります。また、昨年度から各地区で1回ずつ開催してきたところですが、話し合いを深めるためにも同じ地区で複数回行っても良いという意見を頂戴しております。「なんともいえない」としていた住民の方からは「学生が地域の実情を理解できる」という御意見を頂戴いたしました。「継続する必要はない」とした方からは「参加したが地域ごとに話し合った方が気がする」というコメントがありました。ワークショップでは複数の地区の住民を集めて地区ごとにグループを作っておりますが、おそらく地域単独で実施していくべきという御意見ではないかと思われまます。ワークショップの改善点につきましては住民の方から「テーマの絞り込みが必要」「もっと住民が参加しやすい開催方法があればよかった」、学生さんからは「もう少し時間が欲しい」ということで、運営方法に関する御意見を頂いております。

6ページを御覧ください。住民の方に対しては学生に接してみた感想、学生には住民の方と接しての感想を尋ねております。住民の方からは「世代や地域を越えて意見交換できることは大変良い」「若い人の意見が聞けてよかった」「地域住民ではない見方ができるので良いと思います」ということで、異なる世代での意見交換を前向きに評価していただいておりますし、学生ならではの視点での意見が気づきにつながったということが推察されます。学生からの意見としましては「自分たちができることをたくさん見つけ出していきたいと思う」「ニーズは地域によって違うのだと感じました」となっております。各地域の特徴を捉えたうえで、自分たちができることを見つけていきたいという前向きな意見を頂戴しております。

7ページを御覧ください。学生の皆さんに「地域の方から協力して欲しい」と言われたらどう思うかを尋ねました。学生15人中10人が「協力したい」とし、「前向きに考えたい」が4人、「難しい」という方が1人となっております。自由記述を見ますと、「活動の前に地域のことを知る機会があるとよい」「交通費が出ると良い」という意見がありました。

最後、その他の意見としましては、地域住民の方から「終了時間を厳守し

てもらいたい」「地区ごとでグループワークを実施して欲しい」という御意見を頂いておりました。

ワークショップについての報告は以上でございます。

小柳会長 : ありがとうございます。ただいまの説明に対しまして、御意見や御質問がありましたらお願いいたします。

船橋委員 : ワークショップを実施することで各地域の課題が見えてきたということが書かれていますが、今後この課題をどう取り扱っていくのかということをお尋ねしたいと思います。

島田主査 : まずワークショップの場で解決できるものはその場で対応していくことを考えております。ただ、そこでは解消できないもの、あるいは地域を越えて共通しているような課題もあると思われまますので、そういった事柄についてはこちらの協議会で委員の皆様にご審議いただければと思っております。

中里課長 : 在宅の高齢者が生活をするうえで、具体的にどのような困難を抱えていらっしゃるのかを把握する必要があると考えております。これまでワークショップの中でニーズを引き出すことに注力してきましたが、次の段階で自分たちが何をできるか話し合っていく必要があると考えておりますので、そうした方向で進めていきたいと思っております。

高瀬委員 : アンケートの回答で男女のところを無回答にしている方がおられますよね。時代の変化に応じた聞き方を考えた方がいい項目なのかもしれないと思いました。

小柳会長 : 最近、様々な地域を対象にした調査では「男性」「女性」「どちらでもない」という項目を設けるものも少しずつできてきているというのは感じるようです。深い意味を持つ無回答だったかもしれませんね。

御厨委員 : 学生さんが非常に前向きな意見を出していただき、地域の活動に参加したい、協力したいという御意見が出ていますので、どうにか地域と学生さんを結びつけるようなかたちができるのであれば理想的なのかなと思っております。何ができるのかということ容易ではない感じはしますが、皆さんと話し合いながら進めていくことができればいいなと思ったところです。

小柳会長 : 学生の話に関連しますと、学期末に全ての授業ではないのですが満足度調査というものをします。全員が満足するという事はなかなか無い状況です。ワークショップでは15人の学生全員が「参加してよかった」「ワークショップを継続すべき」と答えているのは、あまり見たことが無いですね。そうした意味では教育機関にいる身として驚く部分です。学生の中には「地域に協力したい」という意見を多くもつ者がいるというのは大変良いことなのですが、一方で学業との両立ということとも調和していければと思っているところです。

高瀬委員 : 学生さんたちから「参加してよかった」という声が出ているのは良いことです。この資料には学生の出身地といったバックグラウンドが載っていませんが、地元に戻って何かこうした地域活動や社会福祉に携わるようなイメージを持った人もいたのかなと思っています。いずれにしても非常に良いことだと思っています。

小柳会長 : 八戸の大学に在学しているのですが、例えば岩手県二戸町、陸前高田市の方面から来ている学生も参加させていただいております。このワークショップを通じて「八戸に興味が出てきた」という話も出て、八戸市を中心に福祉関係機関への就職を目指すという学生も現れてきています。そのきっかけがこのワークショップだったという声も聞かれるようになってきておまして、少なからず影響があります。良い意味での影響が学生と住民の双方にあるのではないかと考えております。

他に御意見等がないようでしたら、次に進めさせていただきます。

次は、報告案件2の「高齢者の社会的居場所に関する調査の進捗状況について」事務局からお願いします。

島田主査 : 高齢福祉課の島田と申します。私からは資料2の説明をさせていただきます。まず、本調査がいかなる枠組みで行われているかについて申し上げますと、資料5にありますとおり、昨年度ワークショップおよび当協議会での議論を経てまとめた9つの対策のうち、対策7にある高齢者の居場所づくりに関連して実施しているものでございます。

資料2に戻りますが、経緯としましては第3回協議会でまとめた対策の一環として、高齢者の居場所づくりについて検討する際の基礎資料を得ることを目的として、小柳会長、社会福祉法人白銀会、八戸市の三者が協力して調査を行うことといたしました。この調査は単純なアンケートではなく、研究計画を立てて倫理的に問題が無いかの承認を受けてから実施しております。

次に調査概要でございますが、目的としましては地域における高齢者の居場所へのニーズやその充足のための実践について探索的に明らかとすることを目的としております。調査方法につきましては、社会福祉法人白銀会「地域交流スペースそよ風」を利用する住民約 50 名及び同法人の同事業所での業務に携わる職員に対してアンケート調査を実施しております。アンケート用紙については添付しておりますので、のちほど御覧ください。調査期間は平成 30 年 9 月でございます、調査結果の分析方法は各種統計的な手法を用いることとしております。

進捗状況につきましては、そよ風利用者 48 名、そよ風に従事した白銀会職員 25 名から回答があり、現在入力及び分析作業をしている段階でございます。そして今後についてですが、集計作業が一段落した段階で、白銀会職員を交えた中間報告会を開催し、現場の生の声を重ねて聴取したうえで最終報告案をまとめ、当協議会に諮らせていただければと考えております。

資料の裏面を御覧いただきますと、大まかな回答者の属性が載っております。そよ風の利用者の方は、女性が多く、年齢は 75 歳以上の方が多いということになります。75 歳以上でも自分の足で通っていらっしゃるということです。私も何度かそよ風に足を運んでおりますが、非常に元気です。お住まいの地区につきましてはほとんどが白銀地区の方でした。白銀会の職員さんに関しましても女性が圧倒的に多いという状況でありまして、年齢は 30 歳代から 50 歳代のところが主力になっているというイメージでございます。所属部署はデイサービス、グループホームが主力、職種につきましては介護士・寮母と現場に近い方が主力となっております、現在回答の集計等を進めているところでございます。ここには記載しておりませんが、現時点での回答内容を御紹介いたしますと、利用者の方の目的意識としましては「健康づくり」というニュアンスの方が結構おられます。「居場所づくり」と明確に思っている方はそう多くはなく、参加を継続することで「結果として居場所になる」というのが真相ではないかという印象を持っております。時々高齢者の居場所に関する議論では世代間交流に対する大きな期待が寄せられることがありますが、そよ風の調査では圧倒的なインパクトを持つほどではありませんでした。確かに若い人と交わりたいという意見があるのですが、一方で同世代で集まりたいという意見もございます。白銀会の職員さんにつきましては、従事したきっかけや負担感、従事することの意味などを質問しております。実は負担が増えたという方は多数派ではありませんでした。ほとんどの方は「負担の変化は無い」としております。そして今後も従事を続けたいかを尋ねたところ、ほとんどが「続けたい」と答えております。しかも「負担増がある」と答えた方も「続けたい」としております。これはなぜかということ

で自由記述の項目を設けていたのですが、簡単に申し上げると苦勞に勝るやりがいがあるということのようです。地域の方に感謝される、感謝の言葉を明確に伝えてもらえるといったことが嬉しいということでもあります。調査前の時点では、負担が増えて辛いと思っている職員さんが結構おられるのではないかと考えておりましたが、そうした私の仮説は良い意味で否定される結果になりそうです。おそらく負担とやりがいのバランスについては、職場の管理者等がうまく加減をしていることが作用しているのだろうと思っております。これらについてはデータを精査していくなかで、より具体的に論じていくことが可能であると考えております。私からは以上でございます。

小柳会長 : ありがとうございます。ただいまの説明に対しまして、ご意見、ご質問などがありましたらお願いします。

吉田委員 : 実際にそよ風の活動に従事してる身でもありますので発言をさせていただきます。定期的な開催のほかに、今回作品展を3日間にわたって行いまして多くの方に足を運んでいただきました。公民館などの作品展に出品している方もおられるのですが、そうした方というのは公民館で行っているクラブ活動等で習っている方というイメージのようです。個人的に習ったり練習したりしているものについては、なかなか日の目を見ることが無いという話がありまして。利用者から「こうして飾ってもらえるなら自分も」「来年もやるんでしょ」という、意欲的な話も聞かれています。こうしたことも生きがいにつながるのかなと感じたところです。

小柳会長 : 作品展というのはもともとあったプログラムではないですね。

吉田委員 : はい。秋には公民館などで文化祭が行われておりますので、うちでもやってみましょうという話が出て、実施しました。皆さんはじめは「作品は無い」とおっしゃっていましたが、実際にはいろいろお持ちいただいて想像以上の作品が集まりました。来場者も多く、そのこともやりがいになったようです。

高瀬委員 : どういった感じで作品を集めましたか。

吉田委員 : そよ風の利用者に企画を口伝えして、それが口コミで広がっていきました。「重くて運べない」という方もおられましたが、それは白銀会職員が会場まで運ぶお手伝いをいたしました。そして終わった後にはお礼状を作ってお渡ししております。

高瀬委員 : 出品する人も良かったし、見に来た人にとっても良かったということですね。

話題は変わりますが、そよ風の利用者に対するアンケートなんですけれども、参加目的を問う項目もありますか。

島田主査 : はい。初回参加時の目的を問う項目を加えております。まだデータの精査が済んでおりませんが、健康づくり、仲間づくりのあたりが多い印象です。

高瀬委員 : なかには、家にいるよりも光熱費がかからないということで、こうした集まりに参加したり、スーパーなどの休憩スペースで過ごしているという人もいらっしゃるようです。その点も少し気になるところです。

島田主査 : アンケートには「居場所がありますか」という設問もあるのですが、現時点では「居場所が無い」と答える方は多数派ではありませんでした。ただ、高瀬委員がおっしゃったように、商業施設で何時間も過ごしているとか、市役所のテレビがあるところにずっと座っているという話を聞くこともございますので、日々の生活の中で居場所が無くて困っている方もいらっしゃると思います。

高瀬委員 : 閉じこもるよりはいいのかもしれないけど、少し気になりますね。

小柳会長 : 他にも御意見等ございますか。

船橋委員 : 居場所に関するアンケートなんですけれども、そよ風にいらっしゃる方の実態は見てくると思うのですが、閉じこもりがちの方についてはどうなんだろうかと思います。そのあたりは、どのようにお考えですか。

島田主査 : 委員がおっしゃったように、外部との繋がりが少ない方の実態というのが最も知りたいところではあるのですが、なかなか実態が分からないというのが正直なところでございます。今回の調査は手始めということでしたけれども、協議会の議論の中で次の手立てや調査などが見出していければと思っております。

小柳会長 : 社会的な居場所づくりの福祉実践ということで行われている中で、その効果を明らかにするという点では当調査に意味があるかと思えます。少なく

とも実践されている方々が手ごたえをもって関わっておられ、またやりがいを感じている様子というも見られております。この点についてはアンケート結果が精査されるなかで根拠が見えてくるのかもしれませんが。他にも御意見ありましたらお願いします。

堀内委員 : 学生さんが何か地域の活動に参加したいという気持ちになったときには、例えばそよ風さんのお手伝いをするとか、企画を持ち込んでみるとかというのがあると、入っていきやすいような気がするのですがいかがでしょうか。

吉田委員 : みんな食堂とかで学生さんにお手伝いしてもらっているときもありますのでちょうどいいと思います。

堀内委員 : 実際に通ってこられた方が学生に色々教えるとかというのもどうかなど。

吉田委員 : 参加者の声が盛り上がってくればそうした展開もありえると思います。実際、食堂のお手伝いに来ていた地域の方から、「皆さんにオカリナを披露したい」という提案がありまして、ハーモニーの会で演奏していただきました。このように要望を何かの形で表現できればと思います。

小柳会長 : 私が所属している大学でも地域福祉や高齢福祉等に興味を持っている学生がいるのですが、ワークショップに参加することで関心や地域貢献に対する意識が強まってきているということもあります。例えば私が学生との間に入ることで地域とつなげていく動きをすることも可能だと思いますので、必要に応じてお声掛けいただければと思います。

池田委員 : 少し話題がスライドするかもしれませんが、そよ風を利用している方が困り事を話していたことはありますか。

吉田委員 : みんな食堂の話になるのですが、当初は事情により孤食になっている方をお招きするイメージだったのですが、該当しない方も見られるようになってきて、そうした声があることを利用者経由でうかがっております。この点は検討課題ということで法人でも話題にしているところです。あと、「多少なりとも費用を受け取るべきではないか」という御意見も頂いています。

御厨委員 : 常時 50 人くらいはいらっしゃっているのですか。

吉田委員 : 20人前後といったところです。

御厨委員 : 職員さんは何名くらい従事しているのですか。

吉田委員 : みんな食堂はボランティア等を含めて20人ぐらいで対応しています。利用者を含めると40人ぐらいが建物内にいることになります。他のプログラムは職員3人から4人といったところです。

高瀬委員 : みんな食堂は今のところ全く費用を頂いていないのですか。

吉田委員 : 頂かないでやっています。食材を寄付してくださる方がおられたりして、そうしたものも活用しながら運営している形です。

高瀬委員 : 善意で運営できているというのはいいことだけれども。通える人は無料で利用して、通えない人は色々お金がかかるというのは少し垣根というか壁というか、そうしたものを感じますね。

吉田委員 : 今回のアンケートの中に費用についての考え方を問う質問が入っていますが、これも参考にしながら考えていければよいのではないかと思っています。

高瀬委員 : そうですね。データは一生懸命分析中ということですので、その結果が見えたら再び話題にしたいところです。

小柳会長 : 他にないようでしたら進めさせていただきたいと思います。
次は、報告案件3の「高齢者のごみ捨て支援について」事務局からお願いします。

島田主査 : この件につきましては資料がございません。口頭での報告となります。今年の2月に柿の木苑さんが開始したごみ捨て支援ですが、利用していた方が先日在宅のままお亡くなりになったということをお伝えいたします。本人さんが自宅での生活を望んでおられたものの、ごみ捨てが大変であるということで悩んでいたところ、柿の木苑さんや町内の協力によって本人さんは最後まで御自宅で過ごすことができたということでもあります。生活支援体制整備事業では在宅生活の維持を至上命題にしているわけではありませんが、御本人が望む生活をできるかぎり続けることを目指してやってきたものですから、少しは御本人の思いを実現するお手伝いができたのかなと思います。本日欠

席の豊山委員に、私が電話で「本人さんの思いを実現するお手伝いのできたのではないかと考えている」という話をしたところ、「そう言ってもらえれば対応したかいはあります」とのお答えでした。また、この方は我々の新たな取組の第1号となってくださったということで、当事業にとって恩人とも言えると思っております。今後ごみ捨て支援等の活動は続けていくことにしておりますが、ひとまず御報告ということでお伝えいたします。

小柳会長 : ありがとうございます。ただいまの説明に対しまして、御意見、御質問などがありましたらお願いします。

高瀬委員 : せっかくスタートした取組ですので、今後も市内に波及していけるようにしていければと思いますね。

島田主査 : 現在は、柿の木苑さんが1件、東幸園さんが1件の計2件対応しております。先日のワークショップでもごみ捨てのことが話題に出ておりましたので、そうした声を必要に応じて支援につなげていきたいと考えております。

高瀬委員 : 以前も聞いたかもしれませんが、支援してくれる障がい者の方にいくらかは対価をお支払いしていましたよね。

島田主査 : はい、そのように聞いております。

審議案件

小柳会長 : せっかく生まれた社会資源、実践ということですので周知や継続に引き続き取り組んでいけたらと思います。

その他に、特にご意見等がなければ、進めさせていただきます。

次は、次第3、審議案件の「高齢社会フォーラムにおける提言事項への対応について」事務局から説明をお願いします。

島田主査 : 私から御説明申し上げます。資料4を御覧ください。委員の中には演者として登壇した方もいらっしゃいますが、10月12日に高齢社会フォーラム in 八戸が開催されました。毎年地方開催は1か所となっているのですが、今年度は当市が選ばれましたので開催させていただきました。

【当日の様子が分かる写真を見せながら状況を説明】

島田主査 : フォーラムでの話題ですが、「人との交流の場や集える場がある」「自分の役割や居場所がある」「日常的に話し合える仲間がいる」「地域貢献、社会貢献できるような環境にある」「趣味や楽しみなどの生きがいを持てる」というところを目指していく必要があるのではないかという話が出ておりました。

その一方で現状はどうかといいますと、「一人暮らし高齢者の増加」「地域の繋がり希薄化」などにより、かつてのように家族や近隣住民が緩やかに見守ったり、世話をやいたりする状況が減ってきている。その結果、「孤独な人はより孤独に」「内にこもりがちな人はより内に」ということになり、「社会的役割や居場所の喪失」「心身機能の低下」「気分の落ち込み」などが懸念されるようになってきているという話でした。

今後の方向性につきましては、大きく分けて2点ございました。1つは、地域や社会全体で高齢者を孤立させないように、居場所づくり、仲間づくり、役割づくり、生きがいづくりに取り組むということでして、パネリストからは、さりげなく手を差し伸べられる状況が望ましいという指摘もありました。決まりだからとか、仕組みができたからというような機械的な感じではなくてということです。もう1つは、高齢者を支援すると同時に高齢者自身の活力を生かすという視点でございます。当協議会でも話し合っただけでしたが、高齢者像を勝手に作りあげてしまわないということです。先ほど吉田委員からもお話がありましたが、そよ風での作品展を私も見に行っただけでしたが、そよ風に通っている方の作品のほかに、要介護の認定を受けている方の作品もありまして、特に周りと比べて遜色の無いものだったと思えました。そうした状況を見て考えたのは、作品、アートといったものを通じて高齢者のイメージを打破するということができるのではないかと。介護度があるから作品作りやその他のことができないと決め付けてしまうのではなく、見方を変えてもらうきっかけづくりになるようなイベントと捉えてみてはどうかと感じた部分がありました。そうした高齢者の活力を生かす。介護度があって昔よりできなくなった部分があるかもしれないけど、まだできることもある。この点に着目した実践として、池田委員のところで行っているようにデイの利用者が野菜作りをすとか味噌作りをすとかということがあると思われるのですが、いずれにしても高齢者自身の活力に着目していく必要があるという話題が出ておりました。

そしてパネリストからの提言ということで9つございました。1つ目は多分野を包摂したネットワークづくりでございます。地域の団体やネットワークが乱立し、ときに「よそのネットワークが何をしているかわからない」という状況が生じているという指摘です。そこで分野横断的なネットワークを構築してはどうかということでございました。2つ目は住民活動や住民組織

への勧誘ということで、参加意向がある方を確実に活動につなげるための仕組みと、各団体の活動を周知するための取組が必要ではないか。これは、意欲を持つ方がエントリーの仕方を知らないという問題意識からの提言でございました。3つ目はシニアボランティア人材バンクの創設ということで、社会貢献に対する意欲がある方への対応でございまして。現在分析中のそよ風の調査データでも社会貢献活動をしたいという高齢者の方も結構おられることが分かりましたので一定の需要はあると思われまして。意欲が高まっているうちに、活動に結びつけることができればよいのではないかと。そのために人材バンクを設けてはどうかという提言でございまして。4つ目が第2の人生における社会的役割の獲得をサポートする仕組みの整備でございまして。仕事を引退したらとたんにやる事が無くなってしまったという状況になるのではなく、何か仕事以外でも社会のなかで活動できることがあるということが重要なのではないかと。一度途切れてしまうとなかなか大変であるという指摘がありました。第2の人生を念頭に置いた人生設計ができるようにしていく必要があるのではないかと。5つ目は老人クラブ、鷗盟大学、シルバー人材センターの連携強化でございまして。これらの活動に加わっている方々が自主的にクラブやサークルを立ち上げて活動しておられるようなのですが、各会員が減少していく状況にありますので、お互いに交流することで活動を盛り上げていくことができればよいのではないかと。6つ目は高齢者の声を聞くためのワークショップやアンケートの実施ということでございまして。すでに我々の方でワークショップ等を実施しているのですが、この提言ではより高齢者にスポットを当てて実施してはどうかというものでございまして。7つ目はシニアカフェの創設でございまして。これは居場所づくり、健康づくり等多様な意味を持っておりまして、地域の高齢者が気軽に立ち寄って、他者と交流したり、簡単な運動をしたり、文化活動ができるような場を設けてはどうかというものでございまして。8つ目は世代間交流と社会的役割の創設ということで、高齢者が小学校で昔の遊びを教えるなど、世代間交流しつつ役割を感じることができるような取組をしてはどうかというお話でございました。ただ、昔の遊びを教えるだけだと1回で終わってしまうこともあるかもしれませんので、何か工夫は必要だと思われまして。9つ目は市民全体を巻き込んだ地域包括ケアシステムの推進でございまして。当協議会でも取り組んでまいりましたが、地域包括ケアシステムを実現するためには市民全体を巻き込んでいかなければ厳しいだろうという点からの提言でございました。これらの項目の中で印をつけたところがございまして、これは当協議会で昨年度末にまとめた9つの対策と重なる部分があるものです。私からは以上でございまして。

- 小柳会長 : ただいまの説明に対しまして質問等ございますでしょうか。
質問が無いようですので、提言内容全体を総括した意見でも、個別の提案事項への言及でも構いませんので、委員の皆様にご発言にいただければと思います。
- 御厨委員 : 先ほど話題になっておりましたが、「住民活動や住民組織への勧誘」が目につきました。実際に地区社協のメンバーもいろいろな役割を担っている方が多いので新しい方を入れたいのですが、「どう地区社協に加わったらいいのだろう」と思っている方もいらっしゃると思いますので、エントリーの仕方を考えていかななくてはならないと感じました。
- 船橋委員 : シニアカフェについてですけれども、担い手は行政だけではなく民間もありえるのか。また、開催場所としては公民館や商業施設のスペース等、柔軟な運用もありうるのでしょうか。
- 小柳会長 : 中心市街地にある店舗などを活用することも考えられるのかもしれませんが。
- 中里課長 : シニアカフェについては提言の目玉でもありました。高齢者の居場所づくりや健康づくりは大変重要と思っております。今、月に1回程度ほっとサロンが公民館で行われておりまして人気もあるようなのです。参加者のなかから、「もっと回数を増やして欲しい」「近場でやって欲しい」という声も挙がっております。そこで型にはまったサロンではなく、高齢者の方々が自分たちで作り上げていけるようなものかどうかと考えております。公民館に限らずいろいろなところで高齢者が中心となって実施していけるものを実施していきたい。これが各地区に広まっていけば高齢者の居場所づくりの実現にも大きく資するものであると思われれます。とは言いましてもいきなりやろうとしても見当がつかないと思われれますので、例えば市の中心でモデル的なカフェを作り、関係者の方やボランティア人材などの協力を得て実施してはどうかと考えております。そこから地域に株分けするように広めていければと思います。
- 船橋委員 : 私が所属しておりますコープ青森でも、類家にある店舗の一室を使って何かできないかという話題があります。今、お子様の広場みたいなことは実施しているのですが、その高齢者向けバージョンも考えてみたらどうかと感じたものですから。

中里課長 : ぜひ、前向きに御検討いただければと思います。社会全体で取り組んでいくべきことだと考えております。場所の確保がとても大変だと思いますので、場所を企業や社会福祉法人等が開放して下さるというのはありがたい話です。

小柳会長 : 高齢社会フォーラムのパネルディスカッションでも、シニアカフェの創出に関しましてはかなり具体的な話も出ておりましたし実現可能性が高そうなものだと思います。例えば中里課長のお話にもありましたけど、地域のモデルケースとしてシニアカフェを創設し、事業所等と連携を図りながら広めていくという展開もあろうかと思えます。

池田委員 : 私、高齢社会フォーラムにパネリストとして参加させていただきまして、すごく勉強になった部分がありました。シニアカフェをするためにどうニーズキャッチをするかというのも考えなくてはならないと感じています。せっかくやったのに、何のためだったのかが分からなくなってしまうと困りますので、関係者が意見を共有しつつも変化していけるという仕組みを用意しておいた方がいいと思います。

先ほど、柿の木苑さんのごみ捨て支援の話がありましたが、こうした取組を広げていき、困っている人に手を差し伸べることをさらに考えていきたいと思っておりました。

小柳会長 : ニーズがベースにあり、そこから支援が展開されていくという話でしたが、また後ほどお話ができればと思います。

堀内委員 : シニアカフェについてなのですが、参加意思はあっても通えない方、例えば体が思うように動かせず病院と家の行き来で精一杯であるという方などもおられると思うのですが、そうした方々に対して1日30分でも構わないので、会話が出来るような仕組みを考えていければよいのではないかと思います。気がついたら1日誰とも話していないということが無いように。プロだけではなくてボランティア人材等も視野に入れてできることがあればと思います。

小柳会長 : 確かに様々な資源があつたとしても、通えないという方もおられると思いますので、そこに対する手当ても忘れてはいけないことであります。

高瀬委員 : 民生委員を務めるなかで、ひとり暮らしや高齢者のみの世帯とかの見守り

や安否確認などをしております。実際に見守り等のニーズが増えて、民生委員も高齢化、新たな民生委員もなかなか見つからないという現状の中、先日のフォーラムにも参加して参考になることもたくさんありました。正直なところ民生委員のみで地域の課題に対処することは難しいです。支援対象者が増え続けておりますので。元気な高齢者もいらっしゃいますが、地域の繋がりが弱まる中で、他者との接触をあまり持たない人も増えてきている。なんとか、こうした隠れた課題を見える形にしたいと思っても民生委員のみで対処しきれない。私は根岸地区を担当していますが、毎月1回定例会を行い町内会の役員らとも話をし、ネットワークの強化は継続して取り組んでおります。こうしたことをしながら高齢者の見守りを確実なものにしていこうと努力しているところです。それとシニアカフェの件なのですが、地区には生活館がありますので、これを有効活用する方法が無いかと思うんです。活動には費用に係るので僅かでも助成金が必要かもしれませんが、せつかくある施設を有効に活用できればと思います。

小柳会長 : 提案事項に重ねて考えますと、ネットワークづくりやシニアカフェの創設に関わってくる御発言だったと思います。

吉田委員 : 資料の中に、高齢者のことは高齢者に聞くべきではないかという記載があります。私は2回、ワークショップの会場に足を運んだのですが住民の参加が少ないような気がしました。もっと多くの方に参加していただければ、それだけいろいろな意見も出てくると思います。それとシニアカフェに関してですけれども、私自身町内会の役割を少し引き受けておりまして、生活館あたりを活用できればいいなと思ったところです。自分自身の活動にも重ねながら聞いておりまして、町内会に掛け合えばいいなと思った次第です。

高瀬委員 : 一緒に頑張りましょう。

吉田委員 : カフェがあってもそこに行けない方々が多いと思うので、そうした方々をどうしてあげたらいいのかなと、正直悩むところです。独居の男性の方というのもなかなか外に出ない印象もありますし。その結果埋もれてしまうと思うんです。どうしたらいいのだろうか。

小柳会長 : 吉田委員からは、ワークショップでのアンケート結果とも関連させながら、高齢者のことは高齢者に聞くべきといったお話がありました。資料にあるように高齢者の意見を聞くためのワークショップやアンケート調査の実施が充

実してくればということでした。これは既存のワークショップ以外に実施できればという意味合いでしょうか。

中里課長 : 高齢社会フォーラムでの提言を実現していきたいと考えております。どの枠組みで実現させるか考えたときには、先ほど事務局から御説明したように当協議会で実現していくものが多くを占めると思われます。高齢者対象のワークショップにつきましても来年度以降に実行していければと考えております。今年度中にワークショップは市内の全域を終えることになっております。来年度はどうするのかといったときに、高齢者の方々を集めたワークショップをやってみてはどうかと考えておりました。

小柳会長 : ありがとうございます。それからシニアカフェの創設というアイデアもいただき、委員の皆様からも一言ずつ御意見を頂戴いたしました。まとめてみますと、パネリストの提言の中で、まずは高齢者の声を聞くためのワークショップやアンケートの実施を展開させる方向ということと、シニアカフェの創設が共通した話題だったと思います。私の聞き逃しがあるようでしたら、委員の皆様から御発言いただければと思います。

池田委員 : 以前、ワークショップに関して事務局の方とお話をしていたことなのですが、現在のワークショップはマクロ、やや大きめな単位で実施しています。本当に小さな単位、ミクロでの実施もしてみてもどうかと思っています。そうすると地域の方の具体的な課題や問題意識、ニーズが見えてくるのではないかと。一度モデル的に実施してはどうでしょう。例えば鮫の集会場の周辺というように、小規模なものを。

中里課長 : 理想的には町内会単位など今よりも小さな単位での開催だと思っております。ただ町内会単位ですと500程度に対応するのは難しいと思いますので悩ましいところです。現行のワークショップに参加した方が、地元を持ち帰って話題にすることで広がりが出てくればいいのではないかと思います。行政が延々と音頭をとって実施するのではなく、自発的な活動が生み出されてくるのが望ましいと。初回のところは行政でお手伝いをするのですが。

高瀬委員 : これからの課題ですね。今の話に関連させて、町内会単位というのは地域の関係者にとってはなじみやすい事だと思います。連合町内会連絡協議会というものがあり、各地区の連合町内会の代表が加わっております。そこにPRし、その話が各地区、各町内に広がっていくということも必要だと思います。

す。これからいろいろ検討する中で課題が浮き彫りになっていくと思いますが、いずれにしても既存の組織を生かすということを視野に入れた方がいい。チラシがあった方がいいかもしれませんね。不思議に思うかもしれませんが、単独の町内会が意思決定するのが難しい場面でも、「連合町内会でそういう話だったんだよ」というのが説得力になったりすることもある。そうしたことも少し意識してやってもらうといいのかなと。

中里課長 : 担当課とも連絡しながら良い方法を模索していきたいと思います。

御厨委員 : シニアカフェを進める方向になるかと思うのですが、実は先月、社会福祉協議会で中居林地区の住民懇談会を実施しました。参加者は十数名でしたが、地区には2か所の高齢者サロンがあると認識していたところ、話をするなかで「もう1か所ある」という情報が出てきました。どうやら独自で運営しておられるようなのです。高齢者の見守り活動にもつながるという話にもなりました。まだ知らない活動が思いのほかにあるのではないかと感じたところでして、こうした活動がいろいろなところで展開されるのが理想なのかなと思っております。堀内委員がおっしゃったように、サロンに通えない方もいらっしゃるので支援も必要でしょうけど、まずは来てもらえる場所を作る必要があると思います。あと、男性の参加者が少ないという話題も出ていました。

高渕委員 : 私が住んでいる日計ヶ丘町内のほのぼのの交流員と老人クラブが手を結んで月に1回から2回、お食事会とか誕生日会とかをやっております。これは、該当する方々にB5版のチラシを作って配付しながらお誘いしている。それで結構楽しんでおります。例えば五戸温泉に行くとか、パークゴルフをしに行くとか考えて。どうにか閉じこもりがちな方を外へ連れ出そうということをやっています。他の地区でもやっていると思うのですが、広まっていけばいいなと。

池田委員 : 御厨委員からお話があったような活動というのは、思いのほかいろいろあるようですね。この前、南郷で取り組んでいる方がおられるという話をうかがいました。独自で実践している方が結構いるのではないかと思います。そうした情報というのは集められるものですか。

御厨委員 : 私も懇談会で初めて知ったというのが実際のところですよ。

池田委員 : 結構ありそうですね。

高瀬委員 : 把握するのは容易ではないでしょう。社協等の公的なところからお金が出ている活動なら公になると思いますが、独自の取組だとなかなか分からないでしょうね。

池田委員 : なんとか把握する方法があればいいのですが。

小柳会長 : 既存の資源の把握に加えてノウハウの共有によってより実践活動に生かしていくということですね。サロン活動、見守りなど、知られていない活動もあるかもしれない。既存の資源を掴み連携を進めていくということは大切だという話だったと思います。

さて、パネリストの提言内容のうち、当協議会で特に議論を深めていくことを決めていきたいと思います。委員の皆様のお話をお聞きしたところ、1つは「高齢者の声を聞くためのワークショップとアンケート調査の実施」になりそうですね。小地域でのワークショップの実施も含めて。2つめは「シニアカフェの創設」ですね。このようになるとはと思いますが皆様いかがでしょうか。

【異議なしの声あり】

小柳会長 : それでは事務局には情報収集を進めていただいて、次回からはより具体的な議論を進めていければと思います。

本日予定していた案件は以上ですが、他に皆様から何かありましたらお願いいたします。

それでは議事を終了します。皆様のご協力ありがとうございました。進行を事務局に戻します。

山口主査 : 本日も御審議いただきまして、ありがとうございました。委員の皆様から頂いた意見をもとに情報収集を進めまして、次回協議会で御報告いたします。

それでは、以上を持ちまして、第6回 八戸市生活支援体制整備推進協議会を終了いたします。お疲れ様でございました。